

「私たちのために祈ってください」

主任司祭 晴佐久昌英

カトリック教会は伝統的に11月を「死者の月」として、特別に死者のために祈ってきた。高円寺教会でも、例年11月第1主日には合同追悼ミサをあげ、亡くなった方々を思い起こして祈りを捧げている。

祈るならば本当にまごころこめて、ていねいに祈ろうということで、今年からは死者の名前を祭壇脇に大きく掲げることにした。

私たちにゆかりのある死者をきちんと思い起こし、その尊い生涯に敬意をあらわすために一人ひとりのお名前をはっきりと見える形で掲げることは、残された者の当然の思いであり、今なお生かされている者の義務でもあろう。追悼ミサにふさわしい形を相談した結果、本格的な短冊にお一人ずつのお名前を毛筆でしたため、それを特注した掲示板に掲げることとなった。

しかし、そうして実際に掲げられた300人近いお名前を前にすると、そんな私たちのささやかな工夫を恥じ入らせるかのような、圧倒的な死者の尊厳を感じさせられる。一人ひとりがかげがえのないその人生を生ききり、今は天の栄光のうちにある。いまだ苦悩の地を生きるわれわれが、その輝けるお名前を前にいったい何を祈ることができるというのだろうか。

彼らは、いまや神のみもとに生まれ出てそのみ顔を仰ぎ、賛美と感謝を捧げているのであり、イエスのことばで言えば「天使のようなもの」である。いかなれば我々より「格上」なのだ。格上のことを格下が祈るといのは僭越というものだろう。我々はむしろ「弱い私たちのために祈ってください」と祈るべきではないか。

「聖母マリア、私たちのために祈ってください」「すべての天使と聖人、私たちのために祈ってください」と祈るのは、地にある人間の祈りよりも、天の祈りのほうが聖なる祈りだからだ。追悼ミサの心は、この「祈ってください」にある。死者たちは死ぬ前だってこんな私をあれほど愛してくれたではないか。まして今や何の妨げもない天にあって、どれほど愛する者を守り導いていることか。どれほどこの私のために祈り続けていることか。私たちはその祈りに包まれて、ようやく今日を生きているのである。